

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	藤 本 夕 衣
論文題目	アイロニストのかたる「大学の物語」 －A・ブルームとR・ローティの古典論－		
（論文内容の要旨） 本論文は、今日の大学論においてきわめて有力な社会学的アプローチなどではなく、あえて伝統的な哲学的アプローチをとって、大学と古典読解論について論ずる。この議論の前提は、科学を正当化してきた近代啓蒙思想などの「大きな物語」の失墜が近代大学の理念の失効をももたらしたとするJ＝F・リオタールの大学論である。この「ポスト・モダン」状況に向き合う大学論として、まずはA・ブルームとR・ローティの論が、次いで二人を媒介するL・シュトラウスの論が取りあげられ、とくに古典を読むことの意義に焦点づけて検討された。伝統的なビルドゥング論やリベラル・エデュケーション論に拠るなら、古典を読むことが人格を形成し批判的思考力を育成するはずだが、しかし、自律的で批判的な近代的主体が社会を進歩させるという大きな物語が失墜すれば、これらの立論もまた説得力を大きく失わざるをえない。これが、本論文の出発点である。 ブルームに拠れば、近代啓蒙思想は、哲学と市民社会との緊張を緩和し、市民社会の周縁にあった哲学をその内部へと移動させようとした。しかしこの企ては実らず、近代大学の啓蒙的理念は力を失って、「ポスト・モダンの大学」が出現する。そこでは、たとえば「アメリカン・スタイルのニヒリズム」が蔓延し、学生は知的な世界へ向かう駆動力を失うことになる。この病理を克服する力をもつのは、ブルームに拠れば、不完全さの自覚を強いるエロスを回復させ、エロスをともにする友情の経験を学生に与える「グレート・ブックス」である。 これに対してローティは、哲学の求める真理も、科学が追究する客観性も、特定の集団による限定的な合意内容であるにすぎないという。こうして真理と客観性という近代大学の成立前提そのものが否認されるが、同時に、ポスト・モダンの大学には新たな可能性があるともいう。つまり、「啓発的な哲学」は、新たな見方を提示し、科学もまた、強制することなく人々の合意を形成する連帯の模範となるというのである。ところが、形而上学的哲学の解体後には、政治に対して傍観者でしかない文化左翼や分析哲学などが跋扈してくる。これらの傍観者を行為者に変える力をもつのは、歴史を通じて人々にインスピレーションを与え続け、「リベラル・ユートピア」への希望をも与えてきた「偉大なる文芸作品」としての古典である。 このブルームとローティの大学論・古典論の背景には、二人に共通の師であるシュトラウスの論がある。ブルームは、シュトラウスのいう「近代性の危機」という問題意識を、さらにはグレート・ブックス論を継承し、展開した。これに対してローティは、シュトラウスが形而上学的哲学の枠内に留まっており、政治を基礎づけることに終始していると批判する。ブルーム・シュトラウスとローティとの間には、根底的な対立があるが、同時に、共通する「ポスト・モダンの大学」の把握がある。まず、両者は、ともにアイロニーという形で自己否定を含む言説を展開する。さらに、両者はともに、近代民主主義の限界に回避することなく直面し、この限界を乗り越えるために、古典が必要であると考えている。最後に、両者はとも			

に、古典を読む場として重視されるべきポスト・モダンの大学は、社会からの独立性を保たなければならないと考える。こうして、大学で古典を読むことについて、二通りの意義が見いだされる。

第一に、ブルーム・シュトラウスの論に拠れば、古典を読むことは、近代性の危機、すなわち、近代民主主義が実現すべき当為を喪失したままやみくもな決断主義に奔る危機を回避する道である。ここで求められるのは、近代のただなかにありつつ近代の限界を見据えることである。古典を読むことによって、時代を超えた問いに触れ、共通の問いについて異なる選択肢があることに気づくことができる。これが「知を愛する」ということにほかならない。ただし、古典がもたらす哲学的「問い」は、世上の「意見」を溶解する危険をも孕んでいる。そうであるからこそ、哲学の記憶を留めるとともに、社会との緊張関係を維持する場として、大学が重視されるべきである。

第二に、ローティに拠れば、古典を読むことは、ブルーム・シュトラウス流の形而上学的哲学から離脱しつつもなお近代民主主義への希望を保持するという困難な作業を可能にする。「大きな物語」の失墜によって、あらゆるものが歴史的に偶然であるという自覚が生じた結果、形而上学的哲学によって基礎づけられてきたリベラリズムもまた無根拠であることがあばかれた。しかし、たとえリベラリズムを普遍的に価値づける根拠がなくとも、なお「リベラル・ユートピア」に希望をもつべきであり、実際に希望をもつことはできる。相対的な歴史感覚を保持しながらなおリベラリズムに賭けることのできる人、つまりアイロニストでありながらリベラルな価値に希望をもつ「リベラル・アイロニスト」であれば、ポスト・モダンの状況においても、民主主義に可能性をみいだすことができる。しかし、形而上学的な哲学の放棄は、アイロニストの成立条件にはなりえても、リベラリズムへの希望の成立条件にはなりえない。アイロニストは、場合によっては文化左翼に頹落しかねない。アイロニストが「リベラル・ユートピア」の希望をもちうるための手立てが求められる。根拠を失ったリベラリズムになお希望を与える手立てとして期待をかけることができるのは、まさに歴史を通じて人々にインスピレーションを与え続けてきた古典である。ただし、インスピレーションを得るためには没頭できる場所が不可欠であり、だからこそ社会から「避難」する場として大学が求められ重視されるべきであるのである。

以上のように、ブルーム・シュトラウスとローティの大学論、古典読解論は、この領域で今日圧倒的に有力な社会的アプローチに対して、あえて古典的な（政治）哲学的なアプローチをとるものであるが、同時に、互いにダイナミックで生産的な相関のもとにある。かれらの議論は、たんに関連する議論にオルタナティブを提示しているばかりではない。かれらの論は、今後、大学論、古典読解論が展開されるべき基本的な方向性を示唆しているものとしても、十分に評価することができるのである。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、今日、社会学、制度学などの実証的アプローチが圧倒的に優位な大学論の領域で、あえて古典的な哲学的アプローチをとって、大学の本質ないし理念について語ろうとしている。この語りの前提は、既存の大学および大学論である。本論文は、この既存性を批判的に対象化し、それによって本質ないし理念について語る立場を築こうとしているのである。

今日の我が国の大学論の領域では、危機と対処について語られることが多く、その語りの内容は、多くの場合、実証的肯定的な状況論であり、制約された範囲での具体的な対応策であり政策論である。まれに大学の本質や理念について語られることもないではないが、その多くは十分に現実に根差さないたんなる意志表明にとどまりがちである。

大学の本質や理念について批判的に語ることは、時代錯誤の徒勞であり、反時代的であるかのようにみえざるをえない。したがって、あえてそのように語ろうとするなら、語りのうちに自己否定を含んだ「アイロニスト」として語るほかはない。本論文でこのような「アイロニストのかたり」の典型として取りあげられるのは、シュトラウス、ブルーム、ローティである。著者は、リオタールの「ポスト・モダンの大学」論を出発点に据え、古典を読む意義に関する議論を手がかりにして、シュトラウス、ブルーム、ローティの大学の本質論、理念論を、順次検討している。

本論文で著者が繰り返し指摘しているように、これまでシュトラウス、ブルーム、ローティの三者は、それぞれに既存の政治的な文脈のうちに一たとえば保守ないし革新などとして一位置づけられてきており、この位置づけの頑固な固定性が、それぞれの論の内在的検討を妨げてきた。今日では、このようなラベリングが失効するにたる理論的成果が、それなりに蓄積されつつある。本論文は、この新たな事態を受けて、既存のラベルを剥がして、それぞれの理論を直に検討するという作業を敢行している。この地道な作業によって、三者それぞれの理論的意義と相関が示された。この点に、本論文の意義の一つを認めることができる。

さらに、ブルームとローティの理論の異同と関連は、両者を媒介するシュトラウスの論を仲立ちに据えることによって、より一層鮮明なものとなる。シュトラウスの論は、教育の理論でこれまで十分に着目されてきたとはいえないが、著者は、シュトラウスが大学論、古典論の論者として取りあげるに十分に値すること、さらにこの媒介に着目することによってブルームとローティの論の相関が一層明らかになることを明らかにし、このような意義をもつシュトラウスの論の検討を敢行した。このこともまた、本論文の積極的な意義の一つである。

本論文は、ブルームとローティの大学論と古典読解論を、次のようにまとめている。つまり、ブルームに拠れば、「ポスト・モダンの大学」の病理を克服する力をもつのは、不完全さの自覚を強いるエロスを回復させ、エロスをともにする友情の経験を学生に与える「グレート・ブックス」である。これに対してローティは、歴史を通じて人々にインスピレーションを与え続け、「リベラル・ユートピア」への希望をも与えてきた「偉大なる文

(続紙 4)

芸作品」としての古典を重視すべきであると考え。したがって、ブルームに拠れば、哲学の記憶を留めるとともに、社会との緊張関係を維持する場として、大学が重視されるべきであり、ローティに拠れば、インスピレーションを得るために没頭できる場所が不可欠であり、だからこそ社会から「避難」する場として大学が求められ重視されるべきである。この社会との緊張関係にある避難所としての大学という発想は、フンボルト以来の近代大学論の系譜にしっかりと位置づくとともに、これを一步進めるものでもある。この連関を明らかにしたこともまた、本論文の功績である。

著者は、シュトラウス、ブルーム、ローティの大学の本質論・理念論を広範な理論的文脈のうちで検討するために、積極的に広範な文献の探索、読解、整理をおこなった。本論文のこの果敢な作業は、たしかにシュトラウス論、ブルーム論、ローティ論それぞれの個別的展開としてはなお十分とはいえないにしても、相互の連関と異同において固有の立論をそれぞれに深く詮索すべき足場がしっかりと築かれたと評価することができる。このことは、たとえば本論文で若干触れられたビルドゥング論、リベラル・エドゥケーション論、古典読解論についても同様であり、個別理論の詮索としてはたしかになお不十分であるが、しかし、それらがポスト・モダンの大学に至るまでの大学論の展開という大きな文脈に位置づけられることによって、個別理論それぞれをよりいっそう深く展開する足場が与えられたと考えることができるのである。

以上の原理論的な作業を通じて著者は、大学論、古典読解論について、「哲学の避難所」としての大学という本質論、理念論を提起した。この本論文における既存の大学論を対象化する立論は、今後は、既存の理論的蓄積のかたちづくる文脈に位置づけられ、包括的な大学論、古典読解論の構成へと進められるべきである。

このような課題と関連して、本論文について、とくにローティの歴史相対主義的立論の妥当性をめぐって十分な論及がなされていないとの指摘があった。さらに、「大きな物語」の解体以後の「大学の物語」という本論文の理論構成に対して、わけても形而上学的哲学にかならずしも否定的ではないシュトラウスとブルームの「大学の物語」についてどのようにして言及することができるのかといった指摘もあった。ただし、これらは、本研究の欠陥を示すものではない。これらは、きわめて大切でありかつ個性的でもある問題設定のもと、行き届いた目配りをもって遂行された本研究に、事後的にみいだされる将来的諸課題である。したがって、これらの課題の指摘は、本研究の博士学位論文としての価値をいささかも減ずるものではない。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成22年11月5日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降